

令和6年8月21日

報道機関 各位

【記者発表のご案内】

室町幕府滅亡約1年前の織田信長書状を発見
細川藤孝にすぎる信長「あなただけが頼りです」

（ポイント）

- 公益財団法人永青文庫（東京都文京区：以下「永青文庫」）には、細川藤孝（1534—1610）を初代とする大名肥後細川家に伝来した数多くの重宝が保管されています。なかでも、織田信長（1534—1582）の発給文書59通はとくに貴重なもので、すべてが国の重要文化財に指定されています。ひとところに伝来する数としては比類がなく、内容も重要なものが多いため、これまで多くの研究者に注目されてきました。
- 2022年、永青文庫と熊本大学永青文庫研究センターとの共同調査によって、永青文庫の収蔵庫から、60通目の信長発給文書が発見されました。慎重に検討を重ねたところ、信長が、いわゆる「室町幕府の滅亡」（将軍足利義昭（1537—1597）の京都没落）の前年にあたる元亀3年（1572）の8月15日に、藤孝に出した未知の書状であることがわかりました。
- 本書状には、元亀4年（1573）7月における義昭の京都没落の背景に関わる貴重な情報が含まれています。信長が足利義昭とともに構築した幕府体制がわずか5年後に崩壊した主な要因が、義昭側近衆と信長との対立にあったこと。側近衆の中にあつて細川藤孝ただ一人が信長と通じ、義昭挙兵の半年も前から畿内の領主層を信長方に組織する活動を続けていたこと、などです。幕府政治が混迷を極める中、まさに藤孝は、信長の京都における頼みの綱でした。
- 義昭の側近中の側近として義昭と信長を結び付けた細川藤孝が、「室町幕府の滅亡」を実現させるキーマンともなったのです。新発見の信長書状によって、信長の権力のあり方を大きく左右した藤孝の存在がクローズアップされます。

（概要説明）

1. 2022年、細川藤孝を初代とする大名細川家に伝来した歴史資料等を所有する公益財団法人永青文庫と、熊本大学永青文庫研究センターは、東京都文京区目白台にある永青文庫収蔵庫の歴史資料を共同で調査し、未知の8月15日付け細川藤孝宛織田信長書状1点を発見しました。永青文庫60通目の信長発給文書の発見でした。

検討の結果、この書状の年代は元亀3年（1572）、「室町幕府の滅亡」（将軍足利義昭の京都没落）の約1年前に書かれたものと断定されました。

信長は藤孝にこう伝えています。

「今年は「京衆」（義昭奉公衆）の誰一人として手紙や贈物をよこさないのですが、その中であつてあなたからは、初春にも太刀と馬とをお贈りいただき、例年どおりにお付き合いくださる……あなたには方方で骨を折っていただき心苦しい限りではありますが、ここは、「南方辺」（山城・摂津・河内方面）

の領主たちを味方に引き入れてください。あなたの働きこそが重要なのです」。

2. このように本書状には、将軍足利義昭と信長との対立から元龜4年（1573）7月における義昭の京都没落、すなわち「室町幕府の滅亡」にいたるまでの経緯を知る上で貴重な、以下の新情報が含まれます。

①元龜3年初めの段階で、信長と義昭側近衆（「奉公衆」）との対立がほとんど修復不能なまでに悪化していたこと。

②ところが、義昭の側近中の側近であった細川藤孝ただ一人が、信長と通じていたこと。

③当時岐阜にいた信長は藤孝を頼り、藤孝をつうじて、山城（現京都府南部）から摂津・河内（現大阪府）方面の領主たちの信長方への組織化を、半年にもわたりすすめていたこと。

3. 本書状から、藤孝による畿内領主層の信長方への組織化が元龜3年8月頃から本格化した事実が判明し、翌年2月の義昭の信長への「逆心」・挙兵の時点で、すでに半年にも及んでいたことがわかりました。これは、義昭の反信長の挙兵が畿内領主層の協力不足のために不発となった事実を考える上でも、たいへん重要です。信長の権力のあり方を大きく左右した細川藤孝の存在がクローズアップされます。

【人物解説】細川藤孝（1534—1610）

幕府家臣の三淵家に生まれる。13代将軍足利義輝の奉公衆として台頭し、義輝暗殺後はその弟・義昭の側近として義昭と織田信長を結び付け、幕府の再建に尽力。義昭の京都没落に際しては信長のもとに残り、信長の直臣大名として活躍。豊臣政権のもとでは秀吉の文化ブレーンとなる。近世大名肥後細川家の初代。



「織田信長書状」 細川藤孝宛 （元龜3年〈1572〉）8月15日 永青文庫蔵

（説明）

【研究の背景（織田政権に関する研究状況）】

近年、公益財団法人永青文庫と熊本大学永青文庫研究センターは、東京都文京区目白台の永青文庫収蔵庫に保管されている古文書等の共同調査に取り組んできました。本書状は、この調査の過程で2022年に発見された永青文庫60通目の信長発給文書です。その内容は、近年歴史学界で進展している織田権力像の見直しという大きなテーマと深く関係するものでした。

室町幕府の15代将軍となった足利義昭と、彼を推戴する織田信長が、永禄11年（1568）に京都に樹立した政権は、諸国大名に発した将軍停戦令の形態・内容といい、畿内における統治形態といい、戦国期の幕府体制そのものでした。近年の諸研究は、こうした認識を前提に、守旧的な義昭と革新的な信長が必然的に反目し、将軍義昭が排除されて「室町幕府の滅亡」にいたる、とみる通説を、ほぼ克服しています。

また、武田信玄宛の義昭書状の年代比定や、信長から義昭への17カ条の意見書（^{かんげん}諫言）の提出時期が

見直され、元龜3年(1572)から義昭自身が「第二次信長包圍網」を組織したとの通説は退けられています。信長の方も、伝統的な幕府体制を克服の対象とは最後までみておらず、むしろその立て直しこそが、京都に権力を保持する現実的条件だと考えていたことが、複数の史料から窺えます。むしろ義昭にとっても、上洛以来、自身を将軍たらしめてきたのが信長の実力であるという厳然たる事実は、否定しようもありませんでした。

では、両者が決裂するにいたったのは何故か。それが改めて問われています。

【新発見書状の内容】

この書状の現代語訳は、以下のとおりです。

八朔(8月1日)の祝儀の詞を承りました。わけでも帷子^{かたびら}2着を送っていただき、その懇切ぶりに感謝します。今年「京衆」(将軍義昭の奉公衆)は誰一人として手紙や贈物をよこしてきません。その中であってあなたからは、初春にも太刀と馬とお贈りいただき、例年どおりにお付き合いくださる。この上なくめでたいことです。鹿毛の馬を贈ります。乗り心地は悪くないと思います。あなたには方々で骨を折っていただき心苦しいのですが、いまこそ大事な時です。「南方辺」(山城・摂津・河内方面)の領主たちを、誰であっても、信長に忠節してくれるのであれば、味方に引き入れてください。あなたの働きこそが重要なのです。なお、具体的には他の案件と一緒にお伝えします。

8月15日 信長から細川藤孝殿へ

「京衆」には「京都の人々」という一般的意味がありますが、本書状の内容の政治性と、「京衆」に当る藤孝をも含むことからみて、信長が具体的に義昭の奉公衆(側近衆)を指して用いた表現であることは明らかです。

【本書状の年代比定】

当時、書状には年号を書き入れないという作法がありましたから、それが何年の書状なのかは、他の文書や記録を手掛かりに推定するほかありません(書状の年代^{ひてい}比定)。

藤孝は、義昭没落直後の天正元年(元龜4=1573年)8月2日には苗字を「細川」から「長岡」へと変えていることが確認されます(志水家文書ほか)から、「細川兵部大輔(藤孝)」に宛てた8月15日付の本書状の年代は、元龜3年以前となる可能性が極めて高くなります。

次に花押型は、元龜4年2月の信長書状(永青文庫所蔵)のそれと同一ではありませんが類似し、元龜2年に比定される信長書状(革嶋家文書ほか)のそれとは大きく異なっています。

さらに、「今年^こは信長と義昭奉公衆との音信が断絶した」と伝えるその内容からみても、義昭没落前年にあたる元龜3年に比定するのが適切です。

【足利義昭挙兵にいたる経緯】

近年の研究によれば、元龜4年2月の義昭挙兵へといたる直接の端緒は、元龜3年7月からの信長による浅井長政攻撃に見いだされています。信長の攻撃は、浅井・朝倉・大坂本願寺・比叡山による反信長連合を形成させてしまいます。しかもその直前の5月には、三好義継・松永久秀が義昭から離反し、畿内の情勢も急を告げていました。

義昭は畿内・近国の混乱に対処するため、8月上旬、本願寺^{ほんんにょ}顕如と姻戚関係をもち信長とも良好な関係にあった武田信玄に、信長と本願寺との調停を依頼しました。しかしこれは、幕府政治に信玄を引き込み、義昭自身の意図とは無関係に信玄と信長を対立させる結果を招くことになり、10月3日、朝倉義景・本願寺に誘引された信玄は甲斐を出陣します。

ところが連合の核であった義景は、長陣の末に12月初め、越前に帰国してしまいます。はしごを外された信玄は、この段階で義昭本人の擁立をはかります。一方の信長は、義昭に17カ条の意見＝諫言を実行しました。

このような政治的混迷の末、翌元龜4年2月13日、ついに義昭は信長に「御逆心」して挙兵し、信長から信玄を含む大名・領主連合への乗り換えに踏み切ることになったのです。

【義昭奉公衆と信長との対立】

義昭の意思決定に多大な影響を与えたのは、「奉公衆」と呼ばれた義昭側近衆でした。特に有力な者に上野秀政、一色^{いっしき}藤長、一色昭秀、曾我^{すげのり}助乗、飯川信堅、それに三淵^{みつぶち}藤英・細川藤孝兄弟などの存在が知られます。わけても上野秀政は武田信玄を信長排除陣営に引き入れた張本人とみられ、同時代の宣教師の著述や、細川家の公式記録『綿考輯録』では、義昭への取次として信長と並ぶ発言力を保持し、反信長の立場から、藤孝とは露骨に対立したとされています。

そして、信長自身が義昭の自分への「御逆心」は藤孝以外の奉公衆の仕業によるものだと認識していたことは、次のような一次史料でも確認できます。

元龜4年2月26日付の細川藤孝宛信長書状（永青文庫所蔵）で、信長は藤孝に、「奉公衆のうちで自分と義昭との和睦に納得しない者から人質を出すよう將軍サイドに求めた。自分と藤孝との内通関係をカモフラージュするため、人質提出対象者名簿に藤孝もことさらに加えておいたので、承知するように」と伝えています。さらに、いま義昭が思い直してくれさえすれば「天下再興」（幕府体制の立て直し）がなるのだが、と述べています。

さらに奈良の興福寺大乘院門跡の尋憲は、日記『尋憲^{じんけんき}記』元龜4年2月28日条で、信長が事態を收拾するため明智光秀を京都から岐阜に召喚して義昭逆心の事情を聴取したと記しています。その結果信長は、これは義昭の「上意」によるのではなく、三淵藤英・細川藤孝兄弟を除く義昭「内衆」（奉公衆）が画策したことだと断定し、彼らを「成敗」するため軍勢5,000で上洛する情勢だ、とも明記しています。

【新発見書状が語ること】

以上の経緯の中に本書状を位置づけると、以下の2点が浮かび上がってきます。関係年表に、本書状で確定された事実をゴシック体で示しましたので、併せてご参照ください。

- ①「今年は「京衆」（將軍義昭の奉公衆）は誰一人として手紙や贈物をよこしてきません。その中においてあなたからは、初春にも太刀と馬とお贈りいただき、例年どおりにお付き合いくださる」

「室町幕府の滅亡」の主因となった信長と義昭奉公衆との絶交・対立、そして奉公衆のうち細川藤孝ただ一人が信長と内通している状況は、遅くとも元龜3年の初めには決定的となっていたこと。すなわち、前年9月の比叡山焼討ちを経た元龜3年初めこそが、義昭・信長幕府崩壊への画期となったこと。

- ②「いまこそ大事な時です。「南方辺」（山城・摂津・河内方面）の領主たちを、誰であっても、信長に忠節してくれるのであれば、味方に引き入れてください」

藤孝による畿内領主層の信長方への組織化は、義昭が武田信玄に信長・本願寺の調停を依頼したのとほぼ同時に、元龜3年8月頃には本格化していたこと。

この点について、永青文庫所蔵の他の信長書状によれば、藤孝の活動は翌元龜4年2月の義昭挙兵の後まで続けられていたことがわかります。義昭の挙兵が、畿内領主層の支持が不十分なまま潰えた

背景には、藤孝の半年にもわたる活動が反信長勢力を抑制したという事情があったのです。

このように本書状は、「室町幕府の滅亡」へといたる複雑な政治史を読み解く上で欠かせない事実を信長自身が語った、信頼すべき一次史料です。

【今後の展開】

信長が、「**あなたの働きこそが重要なのです**」と書き送っていたように、幕府政治が混迷の一途を辿った元亀年間（1570—1573）、信長の京都における頼みの綱は細川藤孝でした。信長と同じ1534年に幕府家臣の名門 ^{みつぎうち}三淵家に生まれた藤孝は、13代将軍足利義輝の奉公衆として台頭し、義輝が暗殺されると、その弟の義昭の側近中の側近となり、義昭と信長を結び付けて正統幕府を再興するという大仕事をやってのけます。その藤孝が「室町幕府の滅亡」を実現させるキーマンともなったのです。信長と幕府権力のあり方を大きく左右した細川藤孝の畿内領主層との人脈、当該時期における彼の具体的活動や政治思想を究明することが、「本能寺の変」を含む織田政権期の政治史研究にとっての大きなテーマとなります。

なお、本書状の原本は、東京都文京区目白台の永青文庫で2024年10月5日～12月1日に開催される秋季展「熊本大学永青文庫研究センター設立15周年記念「信長の手紙」」に出品されます。また、同展覧会に合わせて刊行予定の『永青文庫 織田信長文書の世界一珠玉の60通一』（勉誠社）に収録されます。

●永青文庫とは

永青文庫は、肥後熊本54万石を治めた細川家の下屋敷跡にある、東京で唯一の大名家の美術館です。細川家は南北朝時代の頼有（1332～91）を始祖とし、近世細川家の初代藤孝（幽斎、1534～1610）と2代忠興（三斎、1563～1645）が大名家の礎を築き、3代忠利より240年にわたって熊本藩主をつとめました。永青文庫の名称は、中世細川家の菩提寺である建仁寺塔頭・永源庵の「永」、初代藤孝の居城・青龍寺城の「青」に由来します。所蔵品は、細川家伝来の美術工芸品や歴史資料、そして設立者である16代細川護立（1883～1970）の蒐集品で、国宝8件・重要文化財35件を含む9万4000点にのびります。

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：（センター長・教授）稲葉 継陽

電話：096-342-2304

メール：inaba@kumamoto-u.ac.jp

別紙

関係年表

年代	西暦	月	事項
永禄 8 年	1565	12	細川藤孝、足利義昭側近として、義昭と織田信長とを結び付ける
永禄 11 年	1568	10	信長、義昭を推戴して上洛し幕府体制を樹立
元亀 2 年	1571	9	信長、比叡山延暦寺を焼討ち
元亀 3 年	1572	1	藤孝以外の義昭奉公衆が信長と絶交
元亀 3 年	1572	5	三好義継、松永久秀が義昭・信長から離反
元亀 3 年	1572	7	信長が浅井長政を攻撃、浅井・朝倉・本願寺・比叡山による反信長連合が形成される
元亀 3 年	1572	8	義昭、武田信玄に信長と石山本願寺との調停を依頼
元亀 3 年	1572	8	信長、藤孝に京都以南の畿内領主層の組織化を内密に依頼
元亀 3 年	1572	10	信玄、朝倉義景・石山本願寺の要請によって出陣
元亀 3 年	1572	12	信玄が足利義昭を擁立、信長は義昭に 17 ヶ条の意見書（諫言）を提出
元亀 4 年	1573	2	義昭が信長に「御逆心」して挙兵、藤孝は京都以南の領主層の組織化を継続
元亀 4 年	1573	2-3	信長入京して義昭を包囲、義昭和談に応じる
元亀 4 年	1573	4	武田信玄死去する
元亀 4 年	1573	7	義昭、再度挙兵するも畿内の領主層を結集できずに没落（「室町幕府の滅亡」）